



OTC薬の添付文書を読み解く②
 使用上の注意 「してはいけないこと」 鼻炎薬 (2)

近年鼻炎薬を使用する人が増えているようです。鼻炎薬は多くのメーカーから発売されていますが、使用に際して重要な注意があるものがあります。鼻炎薬を飲んでいる人はぜひ確認されることをお勧めします。以下、添付文書の「使用上の注意」の記載です。

「してはいけないこと」の第1番目に「前立腺肥大による排尿困難のある人は服用してはいけない」。第3番目に「服用後、乗物又は機械類の運転操作をしてはいけない」と書かれている。また、次の項目「相談すること」の中に、「緑内障の診断を受けた人は薬剤師などに相談すること」と書かれている。

上に記した三つの注意事項は、互いに関係はないように見えますが、実は一つの薬剤の作用に係した注意です。その薬剤とは抗ヒスタミン薬と呼ばれるグループの薬です。

鼻炎薬や、かぜ薬に含まれているのは、カルビノキサミンマレイン酸塩、クロルフェニラミンマレイン酸塩、クレマスチンフマル酸塩などです。抗ヒスタミン薬の作用は多彩で、それ故にさまざまな功罪（効果と副作用）を併せ持っているのです。ここでは、使用上の注意、つまり「副作用を防ぐ」という視点から読み解きます。

まず、抗ヒスタミンという言葉ですが、ヒスタミンに抗する、逆らう、防ぐなどの意味です。では、ヒスタミンは体の中で悪い働きをしているものなのでしょうか？

実はヒスタミンは、悪者どころかとても大切な働きをしている成分で、さまざまな食物から体内に取り込んでおり、体内でも作られています。その働きは主に次の二つです。

- ①中枢神経に作用して、覚醒作用、食欲調節、飲水調節、体温調節などをおこなう
 - ②血圧降下、血管透過性亢進、平滑筋収縮、血管拡張、腺分泌促進、知覚神経刺激などの作用
- そして、②の作用が強くなりすぎると、鼻炎などのアレルギー症状がでるようになります。普段はヒスタミン産生細胞である肥満細胞内の顆粒に貯蔵されているヒスタミンが、花粉などによる外部刺激により細胞外へ一過的に放出され、目や鼻の粘膜にある受容体（鍵穴のようなもの）にピッタリはまると、アレルギー反応が起こります。

そこで、抗ヒスタミン薬の出番です。ヒスタミンによく似た偽物（抗ヒスタミン薬）を先回りさせて受容体を塞いでしまう作戦です。

②の作用が抑制されますから、鼻水ポタポタや鼻づまり、目のかゆみなどが止まります。ここまでは望ましいことですが、残念ながら作用は同じ受容体を持つ他の器官にも及ぶので副作用として現れることがあります。膀胱に作用すると排尿障害、目では緑内障悪化を起こします。それ故、排尿障害や緑内障のある人は使ってはいけないのです。

①の作用が抑制されるとどうなるのでしょうか？最も重要なのは、覚醒作用の低下です。抗ヒスタミン薬によって、鎮静作用、強い眠気、認知機能低下が引き起こされます。

鼻炎薬ばかりでなく、咳止め薬、総合かぜ薬、酔い止め薬などに「乗り物又は機械類の運転操作をしてはいけないこと」と書かれているのはそのためです。眠気がでなくても認知能力が低下していることを自覚することが大事です。



